とある世界の物語

トオル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある世界の物語

【Ｎコード】
Ｎ９２２２Ｌ

【作者名】
トオル

【あらすじ】
とある異世界、そこに住むメイド達の日常です。

プロローグ（前書き）

はじめまして、トオルと言います。

皆さんの作品を呼んでるうちになんだか書きたくなって、昔に作ったプロットを引っ張り出してきました。

たいして面白いとは思いませんが頑張って最後まで続けたいと思います。

よければ生温かく見守って下さい。

プロローグ

はじめまして、皆様
私は世界です。

この度は私の中を見に来て頂き、大変感謝致します。

……ん、何故感謝するかですか？

それは私が暇だからです。
暇で暇でしょうがなく、唯一の暇潰しも叶わぬ状況になってしまった今、あなた方のような珍客は大変重宝しているのです。

すいません、少し語ってしまいましたね。

それでは、私の中での出来事を物語として御賞味頂きたい。

一人の主人と数多くのメイド
その日常を、日々変わることのない日常を是非御覧あれ。

メイドAあるいは1号の独白（前書き）

とりあえず1話目です。

メイドAあるいは1号の独白

皆様、お早う御座います。

私はメイドA、あるいは1号と呼ばれる物です。

いえ、呼ばれていたと言った方がこの場合正しいですね。

改めまして、私はこの館のメイド、名はアリスと申します。

私は所謂メイド長と言う地位を御主人様より賜り、日々多くのメイド達をまとめ、職を割り振ることを主な仕事としております。

それともう一つ、メイド長たる私には重要な仕事が御座います。

「お早う御座います御主人様、そろそろ御起床の時間になります。」

それは御主人様を起こすという、朝の始まりを告げる仕事であり……朝一番の重労働です。

「お早う御座います御主人様、朝になりましたよ。そろそろ御起床になって下さい。」

そう告げながら、私は部屋のカーテンを開け放つ。外は快晴、職業柄どうしても洗濯日和としか思い付かないのが悲しいところです。

部屋には日の光が燦々と降り注ぎ、広い部屋中を隅々まで明るく照らす。

もちろん御主人様が眠っているベッドもこの光で照らされているのですが、御主人様は全く起きる気配を見せません。

――何時ものことです

「御主人様起きてください、朝食が冷めてしまいますよ」

まだ起きないという事をわかっていながらも声を掛ける。

声を掛けながら着替えの準備を済ませてしまう。

さあ、ここからが本番です。

「御主人様、いい加減に起きてください。朝ですよ、朝食が冷めてしまいますよ。」

声を掛けながら御主人様の肩を掴み、力の限り、全力で、情け容赦なく、前後に、揺する。

揺する、と言うよりも上半身を持ち上げそのままベッドに叩きつける、と言った方が正しいような気がしますが気にしてはいられませ

ん。

叩きつけても埃のたたない寝具に満足しながら、私は御主人様を揺すります。

「ん、ん……うぅ～……ん」

どうやら目が覚めてきたようです。

「御主人様、お早う御座います。」

「ん……、おはようアリス。もう……朝なのかい？」

「はい、外は快晴ですよ。」

まだ目を覚ましたばかりだからでしょうか、声がどこかぼんやりとしています。

「快晴か……じゃあ今日は外で昼寝かな？」

「まだ眠るつもりですか？」

「もちろん、人間は朝・昼・夜と眠らないと身体壊すんだよ？」

「当然のように嘘をはかないで下さい。」

立ち上がる御主人様に近づき自然にお召し物を脱がし、先ほど用意した着替えをお着せしてゆきます。

「嘘なもんか、僕は一睡でも抜いたら目眩で倒れるぞ。」

「それは御主人様が特殊なだけです。」

着替えを終えると食堂へ向かいます。

いつものように

食堂につきました、それでは私の仕事はここまでです。

「それでは御主人様、本日も宜しくお願い致します。」

そして御主人様は、食堂のドアの向こうへと消えていきました。

これが私の日常です。

メイドAあるいは1号の独白（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

たいして面白くないですが頑張ってみました。

続きもできるだけ早く仕上げたいと思います。

良ければ見守って下さい。

日記１

御主人様に進められ日記なるものを書くことにしました。日記とは日々あったことを書くようです。
基本的に見られることはないようなので自分だけにわかりやすいよう書くことにします。

３年目　５月２０日
今日は私が生まれた日だ。
だからといって皆が何かしてくれたわけではないけど、また一つ歳をとったということは覚えておこう。

３年目　５月２５日
今日は驚いた。
あの寝坊助な御主人様が私が起こしに行く前に起きていたのだ。
思わず思考がフリーズしてしまった私を見た御主人様は大笑いしていた。
明日は普段より早く起こして差し上げよう。

３年目　５月３０日
新しいメイド達が働き出した。
まだまだ働きに甘いところがあるが時間が解決してくれるだろう。

３年目　６月３日
御主人様が日記を見せてほしいと仰った。
でも私は見せたくないので見せませんでした。
それなら内容を教えてくれと言うので、
「御主人様の事を書いています。」と答えたら、
「それじゃあ僕の観察日記だろう」と笑われた。
なにがおかしかったのだろうか？

３年目　６月９日
御主人様がお怪我をされた。
どうやら小鳥を助ける為に木に登った為らしい。
素晴らしい行いだと思いましたが、降りるさいに落ちて足の骨を折るのは余計だと感じます。
しかし私達の仕事が増えるのは喜ばしいです。

３年目　６月１８日
御主人様が足が痛いと言っています。

骨折しているのだから当たり前だと思うのですが、いったいどのように痛いのでしょうか？
怪我をしたことのない私にはよくわかりません。

３年目　８月１０日
ようやく御主人様の足が完治しました。
治ったことを喜び外を走り回っているといきなり転びました。
どうやら今度は額を切られたようです。
なぜ御主人様はこんなに怪我をするのでしょうか？
私にはわかりません。

メイドBあるいは2号の独白

私はメイドB、2号……じゃなくてブルーっていいます。

ずいぶん昔に御主人様が呼び始めたんですが、理由が私の髪が青いからだなんて安直ですよね？

私は食堂で食事の用意をするメイドです。

ようするにコック……いえ、メイド兼コックさんというところです。

あくまでメイドですよ、料理しかさせてもらえないのは適材適所ってやつです。

本当ですよ？

まあそんなことはいいです。

ようは私が食事係だってことを理解していただければいいんですから。

「御主人様〜、今日の朝食はおもーいおもーいステーキですよ！」

私は最高の笑顔で御主人様に朝食を差し出します。

御主人様は笑顔を返してくれます。

「なあブルー、昨日の夕食ってなんだったっけ？」

？なぜでしょう、御主人様の笑顔が少し引きつっています？

気になりますが質問に答えないといけませんよね。

「はい、昨日の夕食はステーキです！」

さらに御主人様の笑顔が引きつっていきます、なぜでしょう？

「あのなブルー、おかしいとは思わないのかい？朝からステーキというのはまだいい、いや良くないけどまあいい。だけど僕の目の前にあるのが、昨日の夜と全く同じというのはいかがなものだろうね？」

御主人様の笑顔が完全に崩れて、いえこれは怒っているのでしょうか？

ですがここで引いてはいけません、だって引いたら怒られちゃいますから！

「食べないのですか？」

「いいかいブルー、食べる食べない以前に……」

「食べないのですか？」

「だから僕は何故昨日の夜と同じなのかと……」

「食べないのですか？」

「だからねブルー、僕は……」

「食べないの……ですか？」

ここで少し悲しげな顔をするのがポイントです。

「いや、食べるけどさ……」

御主人様は渋々とナイフとフォークを手に取りました。

ですので私は最高の笑顔で、最高に元気な声で告げます。

「どうぞ召し上がって下さいっ！」

御主人様は何かを諦めたようにステーキを食べ始めました。

その様子を見て私はホッと一息つきます。

流石に食べてくれないかもしれなかったですからね。

じゃあステーキ以外を出せばいいじゃないかって？

それはできません、ステーキ以外を出すだなんてどう頑張ったって出来ません。

別に私が、実は料理が下手でステーキ以外が作れないからじゃありませんよ。

……本当ですよ？

メイドBあるいは2号の独白（後書き）

文章が安定しません（T_T）

誰かなにかいい方法教えてくださいm（_ _）m

日記2

３年目　１１月３日
御主人様が研究室から出て来ない。
研究熱心なのはいいが時間を忘れる癖はなおしてほしい。

３年目　１１月８日
御主人様が研究室にこもられて５日目
未だに出て来ない。
毎日持って行っている食事はきちんと無くなっているので、問題はないと思いますが……。
心配です。

３年目　１１月１３日
やっと御主人様が研究室から出てきた。話によると研究が一段落したらしい。
とても疲れた様子ですぐに眠りにつかれた。
ようやく安心できました。
それにしてもいったいどんな研究をなさっているのでしょうか？

３年目　１１月１５日
御主人様がやっと目を覚まされた。
そこでどんな研究をしているのか聞いて聞いてみました。
聞いたところによると、どうやら御主人様は人間について研究しているらしい。
御主人様は人間なのになんで今更研究しているのでしょうか？

３年目　１１月１６日
昨日の疑問を御主人様に聞いてみました。
聞いたところによると、どうやら自分と同じような人間を創れるかの研究のようだ。
クローンとはまた違う技術らしいがまだまだ完成には遠いらしい。
今はやっと肉を造ることが出来るようになった段階らしい。
よくわからなかったがきっと御主人様なら完成させるだろう。

４年目　１月２日
新年を祝うのも早々に切り上げまた研究室にこもられた。
またしばらくは出て来ないだろう。

４年目　２月１２日
またこもられた。

４年目　３月１７日
またこもられた。

６年目　１２月２９日
御主人様がおかしい、数日研究室にこもっては出てきてもまたすぐに研究室に戻られる。
いったいなにがあったのだろうか？

１０年目　７月７日
御主人様が倒れた。
原因はわかっている、無理のし過ぎだ。
今御主人様は眠っていますが何かうなされているようです。
とうとう僕一人か……と繰り返し繰り返し呟いています。
いったいどうしたというのでしょうか？
心配です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9222l/

とある世界の物語

2010年10月15日01時32分発行